

高校教育の提供方法の開発および好事例の収集

研究分担者 前田尚子 国立病院機構名古屋医療センター 小児科医長

研究要旨：本研究では、がん治療中の高校生に対する教育支援の実務的な課題を明らかにし、居住地、受療施設によらず平等な教育の提供を受けられるようにすることを目的とする。初年度は、高校生がん患者への教育支援方法と課題、行政と学校との連携について、日本小児がん研究グループ参加施設中、高校教育支援経験がある施設を対象として、アンケートとインタビュー調査を実施した。調査施設のほとんどでICTを利用した遠隔教育の経験があったが、教育支援対象患者の発生から授業開始までに時間を要したり、単位認定がなされない場合もあるなど、多くの課題が明らかになった。今後、好事例の類型化、支援モデルの作成や教育支援の手引書により、患者の居住地、受療施設、在籍高校の設立母体によらず、平等な教育機会提供の実現を目指す。

A．研究目的

AYA世代のうち、A世代は、自立に向けた就学期である。がん診断後の学業継続問題は、A世代患者が抱える固有の悩みであり、約5割の患者は学業の継続ができておらず、「院内・訪問教育が受けられ単位認定される」「遠隔で授業が受けられる」「転籍や編入試験なく元の学校に戻れる」などのアンメットニーズを有している(堀部ら 2017)。実際、治療中の学業継続支援は未だ不十分であるため(川村ら、日児誌、2019)後期中等教育の適切な提供方法の確立が求められる。本研究では、教育支援実施事例、医療従事者等と教育関係者等との連携状況を調査し、行政(教育委員会)医療機関、患者が在籍する高校、特別支援学校などが抱える課題を抽出する。事例調査を踏まえて、ICT(Information and Communication Technology)を利用した双方向通信による遠隔教育手法を用いた教育支援システムを構築することを目的とする。

B．研究方法

1. JCCG(日本小児がん研究グループ)参加施設に対してWEBにより、がん治療中の高校生の教育支援経験の有無についてアンケート調査を実施した。
2. 高校教育支援経験がある施設のうち、詳細調査に協力可能と回答した施設に対して、好事例および、医療者と教育関係者との連携における課題等についてアンケートおよびインタビューによる調査を実施した。
3. ICTを利用した高校遠隔教育支援モデルを提案し、対象患者で検証を行う。(2年目以降)

(倫理面への配慮)

事例調査において、個人の特定に繋がる情報は

収集しないよう配慮した。

C．研究結果

1. 令和元年10月にJCCG参加204施設に対して、Survey Monkeyを利用し、高校生のがん患者の受け入れと教育支援経験の有無について調査を行った。122施設(60%)から回答があり、94施設(77%)が受け入れ経験有、57施設(61%)が教育支援実施との結果であった。教育支援内容の詳細調査に協力可能と回答した49施設のうち15施設について、アンケート調査およびインタビューを実施した。
2. 15施設中13施設がアンケートに回答し、2施設では好事例がなく、11施設から計26例の教育支援例が報告された。インタビューは11施設中4施設に実施した。
3. アンケート調査結果
結果を表1に示す。11施設中9施設でICTを用いた遠隔授業の経験があり、方法はOriHime, Kubi, Zoomなど様々であった。病院側窓口は、医師、看護師、チャイルドライフスペシャリスト(CLS)、医療ソーシャルワーカー(MSW)、支援学校教員等、施設により異なり、学校側は主に担任を中心として、校長、教頭等、複数が対応していた。5施設では教育委員会の関与ありと回答した。単位は、5施設で認定あり、2施設は認定予定と回答していたが、自治体、高校設立母体による違いがみられた。
4. インタビュー調査結果
行政や学校との連携、運用面での課題について尋ねた。行政主導で遠隔授業を提供している自治体では、場所、機器等は学校側が準備するなど、行政、学校、病院の連携でスムーズな教育支援が行われている一方で、行政の関与がなく、病院側が学校に直接支援依頼を行う施設では、

ICT 導入に学校側の理解が得られにくいとの意見もあった。また、遠隔教育を行う場合、院内の学習場所の確保が課題であった。

表1 詳細調査結果

施設	N	設立母体	科	病院窓口	学校窓口	教委	方法	単位
A	2	公	普	看・医	担任	-	訪問 ICT	有
B	1	公	普	看護師	担任	-	訪問	無
C	1	公	普	医師	教頭	+	ICT	有
D	4	公私	普商	CLS 支援校	担任主任	-	ICT	予定
E	1	公	普	MSW	担任主任	+	ICT	無
F	1	公	普	看・医	担任校長	-	訪問 ICT	有
G	8	公	普	CLS	担任主任	+	訪問 ICT	有
H	3	公私	普工	MSW 支援校	担任	-	ICT	公のみ
I	2	公	普	看護師	担任ボラ	-	訪問	無
J	1	公	普	医師 総務部	校長	+	ICT	予定
K	2	公	普	心理士	担任教頭	+	ICT	無

ボラ：学習ボランティア

D. 考察

高校生の教育支援については、院内学級や訪問教育を行う自治体もあるが、数は限られており、特別支援学校への転籍を要したり、前籍校への復帰が困難といった問題もある。闘病中の高校生の教育支援は、患者の将来にとって重要な意義があり、居住地や受療施設、公私立学校の別なく均等な機会が与えられるべきである。ICTを利用した遠隔教育は、院内学級設置や訪問教育の人員確保の難しさを解消できる利点がある。一方、ICT利用の場合、治療スケジュールや体調不良等のため在籍校の授業に参加できない場合があり、単位取得のためには、学校側が教務内規に従いカリキュラムを作成した上で、病院側と綿密に連携する必要がある。

また、学校側はがん治療を終えて退院すれば、病前と同様に振舞うことができると考えている場合も多く、医療者は、がん治療後の体力低下や、免疫不全のため登校を差し控える場合があることなど、患者への医療的配慮の必要性について、教員の理解を得る努力をしなければならない。

退院後すぐに登校できない場合、遠隔教育は有効

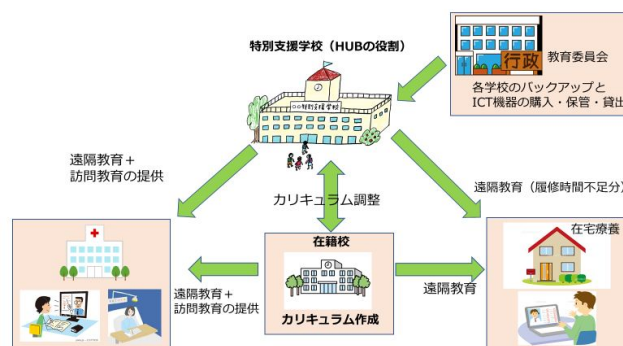
な教育手段となり得る。入院中のみならず、在宅療養中の遠隔授業参加についても単位取得が認められることが望ましい。

以上の課題を考慮した支援モデルを図1に示す。

患者が在籍する高校は、病院側から治療期間等の情報を得て、カリキュラムを作成する。特別支援学校は、在籍校と病院の橋渡し役として、体調不良等によるカリキュラム見直しの相談にのったり、訪問授業や在宅療養中の学習支援に協力する。在宅療養中は在籍校もしくは支援学校が遠隔授業を行う。在籍校、特別支援学校のバックアップやICT機器の管理を教育委員会が行う。遠隔授業は、入院、在宅を問わず単位として認定する。

次年度は、ICTを利用した遠隔教育の実証実験を行い、運用における課題の抽出と解決策について検討予定である。

図1 高校教育支援モデル



E. 結論

闘病中の高校生の教育支援は不十分であるが、教育委員会や学校、医療施設が、少しずつ取り組みは始めている。遠隔教育は、支援方法のひとつとして、多くの施設が実施していたが、行政の積極的関与がある施設において、よりスムーズな支援が行われていた。一方で、前例がないことを理由に行政や学校側が消極的な姿勢であったとの回答もあり、今後、好事例の類型化、支援モデルの作成や教育支援の手引書により、患者の居住地、受療施設、在籍高校の設立母体によらず、平等な教育機会を提供できる可能性がある。

G. 研究発表

- 論文発表
 - 前田尚子 【AYA世代のがんを考える】AYA世代に移行した小児がんサバイバーが抱える問題とサバイバーシップケア 晩期合併症への対応、成人医療への移行支援 保健の科学 61巻8号 532-536、2019
 - 前田尚子, 堀部敬三, 西田佳弘 AYA世代の骨・軟部肉腫診療 AYA世代骨・軟部肉腫サバイバーの晩期合併症と長期フォローアップ 日本整形外科学会雑誌 93巻12号 1062-1066、2019

2. 学会発表

1. **前田尚子** 小児がん治療後の長期フォローアップと晩期合併症調査研究の課題 第23回 JACLS 総会、2019.5.11、大阪
2. **前田尚子** AYA 世代とがん がん相談支援センター相談員継続研修認定取得コース、2019.7.10、東京
3. **前田尚子** 小児・AYA 世代がんサバイバーの長期フォローアップ、日本放射線腫瘍学会第32回学術大会教育講演、2019.11.23、名古屋
4. **前田尚子**、吉野 能、鈴木 知秀、秋田 直洋、関水 匡大、服部 浩佳、川田しお梨、小野 学、二村 昌樹、後藤 雅彦、堀部 敬三 造血細胞移植後の二次性膀胱癌の2例 第42回日本造血細胞移植学会総会、2020.3.7、東京
5. **前田尚子**、堀部敬三、服部浩佳、北川智余恵、近藤建、松野英美、渡邊潤子、林美千子、山田真弓、飯田真由美、竹田錦紀、橘延之、五十川直人、林誠、横井美加 名古屋医療センターにおけるAYAサポートチームの活動 第2回AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会、2020.3.21、名古屋
6. **前田尚子** 長期フォローアップ 健康のための自己管理、二次がん・晩期合併症の管理 第1回 AYA 世代がんサポート研修会、2019.12.1、東京
7. 冨中 美幸, 村端 真由美, 天野 敬史郎, 加藤 由香, 渡邊 健一郎, **前田 尚子**, 堀部 敬三, 平山 雅浩 思春期の小児がん経験者と健常児の身体活動と健康関連QOL 第17回日本小児がん看護学会、2019.11.15、広島
8. 冨中 美幸, 村端 真由美, 谷村 晋, 天野 敬史郎, 堀部 敬三, **前田 尚子**, 渡邊 健一郎, 加藤 由香, 平山 雅浩 中高生の身体活動と健康関連 QOL の現状 第66回日本小児保健協会学術集会、2019.6.20-22、東京
9. 林 誠, 松野 英美, 近藤 建, **前田 尚子**, 堀部 敬三, 中井 正彦 苦痛のスクリーニングを用いたAYA 世代の苦痛に関する検討 第24回 日本緩和医療学会学術大会、2019.6.21、東京

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし